

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00531

研究課題名（和文）「ホロコースト文学」における語圏間の隣接性に関する比較文学的研究

研究課題名（英文）Comparative Study on the Post-Holocaust Literature across the Borders of Languages

研究代表者

西 成彦（Nishi, Masahiko）

立命館大学・先端総合学術研究科・教授

研究者番号：40172621

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：ホロコースト文学はさまざまな言語表現からなっている。戦争を生き延びられなかった被害者の遺品や声の記憶から、生存者の証言を経て、非ユダヤ人の側の悔恨に満ちた自省まで。彼らの用いた言語は、彼らの第一言語が多様であった上に、戦後になってから獲得した言語を用いて書かれたものもある。それらの多様なあり方を一望に収めつつ、ホロコースト研究をシオニスト的なユダヤ研究の枠に閉じこめないように留意した。最終的に、その多様性は、文学が「ジェノサイド」に向き合おうとするときに、つねに試行錯誤を経て、多様な道を探ろうとすることと通じる、普遍性を有するものであることが明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

明治以降の「外地の日本語文学」にも関心をいだいてきた筆者にとって、「ホロコースト文学」の実験性は、驚きでもありはしたが、それは東アジア地域の戦後文学、ポストコロニアルの文学にも通じる実験性であることを確認でき、このことは今後の「外地の日本語文学」をめぐる研究にも反映させていける学術的成果だと思う。歴史学や社会学の分野での「ホロコースト研究」との接合可能性をも試みており、同研究には学際性が欠かせないことを主張していきたい。それこそが「ホロコースト研究」を社会の改善（レイシズムや暴力の制止）をもたらすと信じるからである。

研究成果の概要（英文）：Holocaust literature consists of a wide range of verbal expressions, from the relics or insistently haunting voices of victims who failed to survive the war, through the testimonies of survivors, to the remorseful recollections of either of Jews or of non-Jews. The languages used by these witnesses and writers varied from their first languages to those they acquired after the war. Taking a comprehensive look at these diverse documents, I have been careful not to confine Holocaust studies within the framework of Zionist Jewish studies. In the end, I made clear that this diversity has a universal quality that is consistent with the fact that literature, when attempting to confront "genocide," always seeks out diverse paths through trial and error.

研究分野：比較文学

キーワード：ホロコースト 証言 文学表現 継承語 習得語 ジェノサイド 抵抗

1. 研究開始当初の背景

- (1) 戦後文学の全体を視野に入れた「ホロコースト文学」に対する本格的な研究としては、ローレンス・ランガーの『ホロコーストの文学』*The Holocaust and the Literary Imagination* (1975)、エフライム・ジヘルの『ホロコースト小説』*The Holocaust Novel* (2005)などが、執筆言語を問わず、幅広く「ホロコースト文学」を論じていた点で、いまでも読む価値がある。
- (2) しかし、日本ではランガーの前掲書は翻訳された(増谷外世嗣訳、1982)ものの、それを除くと、フランス語文献に絞った篠田浩一郎の『閉ざされた時空/ナチ強制収容所の文学』(1977)や、最近では、ユダヤ系アメリカ文学に絞った佐川和茂他『ホロコースト表象の新しい潮流』(2018)など、語圏ごとについていくつか著作物が存在するにとどまっていた。
- (3) ポーランド文学の研究から比較文学者としてのキャリアを積み上げてきた研究代表者は、日本の「ホロコースト研究」のなかで東欧文学研究者がいまだ十分な役割を果たせてはいないと考えて、本研究を思い立った。

2. 研究の目的

- (1) 日本でもポーランド文学やイディッシュ文学を研究する研究者の数は増えつつあるが、英語圏やフランス語圏で産み出された作品群と、ポーランド語・イディッシュ語で残された作品群を一括して論じる試みは、今回がはじめてである。
- (2) また加藤有子編の『ホロコーストとヒロシマ/ポーランドと日本における第二次世界大戦の記憶』(2021)が試みたような東アジア地域における戦争(およびジェノサイド)にも目を配った包括的な「ホロコースト文学」の研究も、本研究がはじめてである。
- (3) より広く「ジェノサイドの文学」なるものを構想するにあたって、第二次世界大戦後75年を経た今は「ホロコースト文学」の総括をあらためて試みるにふさわしい時期である。「ホロコースト二世三世」、そして「ポストメモリー」へと徐々に関心が移ろうとしているのが今だからである。

3. 研究の方法

- (1) 日本語に翻訳された「ホロコースト文献」は、ポーランド語文献も含め、けっして少なくはなく、それらを活かしつつ、いまだ翻訳されていない文献に関しては、その紹介にも努めながら、今後の本格的な研究に向けての道筋をつける。
- (2) 「ホロコースト文学」が「被害経験」にとどまらず、むしろ「加害」「共犯」「黙殺」などを含めた「灰色の領域」(プリモ・レーヴィ)を主題化することを確認することで、アジア地域における「戦争文学」との比較にあたって、重要な論点が何であったかをも明確にする。

4. 研究成果

- (1) 解放後の旧ドイツ軍占領地域で歌われていた歌謡や、ゲッターや収容所に残された文書群(ミハウ・ポルヴィチ編『歌だけは無事生き存らえて』...*Pieśń ujdzie cało...*(1947)やシュメルケ・カチェルギンスキ編『ゲッターおよび収容所歌曲集』*Lider fun di getos un lagern*(1948)など)は、ポーランド語やイディッシュ語がベースになっているが、とくに歌謡は「詠み人知らず」も含めて女性が遺したものが少なくなく、「ホロコースト」を生きのびるさいに、女性ならではの困難があったことを後世に伝えるにあたって、これらのテキストが果たすべき役割がいかに大きいかが確認した。
- (2) (1)でふれたような「女性ならではの困難」のなかでは「戦時性暴力、およびそれがもたらした副作用やトラウマ」をめぐって、スーザン・ブラウンミラーの『レイプ・踏みにじられた意思』*Against Our Will: Men, Women, and Rape* (1975)をはじめ、フェミニズム研究と「ホロコースト研究」の結合が、戦後人文学のひとつの徴候であったことを確認した。
- (3) しかもそうした女性サバイバーが戦後に歩んだイバラの道に関しては、アイザック・バシエヴィス・シンガーやウィリアム・スタイロンなども強い関心に向け、とくにユダヤ系ではないスタイロンが『ソフィーの選択』*Sophie's Choice* (1979)で試みた「女性サバイバー」の描き方が、「ホロコースト文学」のひとつの主題として、いまなお重要なものであることを確認した。シンシア・オジックの『ショール』*The Shawl* (1980)が書かれたのが、『ソフィーの選択』が話題になってから間もない時期であったことは、おそらく偶然ではない。

(4) 収容所を生き延びた女性囚人のサバイバルが「抵抗」とも「隷従」とも言い切れない両面を持つことは『ソフィーの選択』に限らず、さまざまな回想(とくに女性サバイバーの)に描かれているが、これとプリモ・レーヴィの「灰色の領域」とを混同してはならないし、完全に切り離すこともできない。そもそもこれまでの「ホロコースト文学」は、男性のサバイバル経験に偏りがちだった。そこでは勇敢な抵抗を試みたか否かという二項対立に巻きこまれた男たちの葛藤に対する関心が主だったということである。しかし、女性サバイバーの証言や回想に目を向けることで、そう名づけられるべき「抵抗」の様態をもまた問い直すことの必要性が生じる。そこはこの間、戦時性暴力の被害をこうむった女性たちの「抵抗」を論じてきた人文諸科学のトラウマ研究との関係が重要だと確認できた。

(5) 「灰色の領域」を問題にするときに、すでに「主体の消滅」を経験してしまっていた「回教徒=ムーゼルマン」については、レーヴィを経て、ジョルジョ・アガンベンの『アウシュヴィッツの残りもの』*Quel che resta di Auschwitz* (1998) を避けて通ることはできないが、今回の研究を通して「人形」(ヘブライ語で「ブバ」、ドイツ語で「フィグーレン」、イディッシュ語で「シユマテス」という語彙が、現場では「もはや人間ではない人間」(遺体を含む)を指すタームとして用いられ、イェヒエル・ディ=ヌール(カツェトニク 135633)の『人形たちの家』*Beit Ha-Bubot* (1953) は、その代表的な例だと言える。

(6) 「ホロコースト」を考える際に、「ゲッター」はなまじ「ユダヤ人の自治」に委ねられていたという側面を有していたために「殺戮場」としての側面だけでなく、「賭博場」や「精神科病棟」、さらには「繁殖場」としての側面をさえ有していたとヤヌシュ・コルチャクは書いている。こうした「ゲッター」に関しては膨大な手記が遺されているが、フランス語作家、アンナ・ラングフスの『塩と硫黄』*Le sel et le soufre* (1960) は、女性サバイバーの文学作品として、きわめて貴重である。

(7) ユダヤ系ポーランド人のサバイバルは、非ユダヤ人(アーリア人)の好意や温情なしには難しかったが、こうした困難さに関しては、ズザンナ・ギンチャンカのようなユダヤ系詩人ばかりでなく、イェジー・アンジェイエフスキのような非ユダヤ人作家が倫理的な使命を引き受けた。これはアウシュヴィッツなどの絶滅収容所の非ユダヤ人囚人の生き残り(たとえばシャルロット・デルボー)もまた引き受けることを強いられた重たい課題だった。「ホロコースト文学」を語るにあたって、この部分を欠かすことはできず、『ソフィーの選択』は、こうした系譜のなか位置づけることもできる。

(8) 「ホロコースト」を生き延びることが、「正当防衛」や「復讐」といった武力行使をともない、それがイスラエル建国後の「イスラエル国防軍」の存在理由や存在証明にもなっていることは無視できない。アウシュヴィッツの生き残りであったプリモ・レーヴィが小説『今でなくていつ』*Se non ora, quando?* (1982) で「ユダヤ人パルチザン」に光をあてたことの意味を問うことは、「ホロコースト」を単なる「無辜の民の犠牲」として描いて終わるのではない「ホロコースト文学」の負担の重さを測る上で重要だ。

(9) このような道筋で戦後文学を見ていけば、『異端の鳥(ペインティッド・バード)』*The Painted Bird* (1965/76) において暴力にも手を染めながら生きのびた「少年」を描いたイェジー・コシンスキの「ホロコースト文学」のなかでの位置も定まってくるだろう。

(10) 文学的な営為に関与できるのは、生存者のみだが、その多くは戦後までは生き延びられず、生存者は、名もなき犠牲者や、戦後まで生きのびられなかった犠牲者の「代わり」に書かねばならなくなる。ヨーロッパの外で「ホロコースト」を生きのびた表現者たちは、出来事の痕跡に目を凝らし、その声に耳を傾ける、一種の「考古学者」であり、「ホロコースト文学」は「ホロコースト文学研究者」をもまた「考古学者」たらしめるのである。

(11) 「アウシュヴィッツ以後に詩を書くことは野蛮である」とテオドル・アドルノは書いたが、むしろ「アウシュヴィッツ以降にこそ詩は書かれなければならない」どころか、「そうした詩にひとは耳を傾けなければならない」というのが、本研究の末にたどり着いた結論のひとつである。

(12) これらの研究成果は『死者は生者のなかに』の題で、雑誌『みすず』に連載し(2021-2022)、(11)に記したことは、米国の詩人、ジェローム・ロゼンバーグの詩作に絡めたエッセイを冒頭に書き足し、『死者は生者のなかに / 「ホロコースト」の考古学』(みすず書房、2022)として書籍化した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 西成彦	4. 巻 第65巻・第5号
2. 論文標題 世界がゲッター化する時代に ゲッターの花	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 162-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 第65巻・第7号
2. 論文標題 世界がゲッター化する時代に ゲッターの子守唄	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 150-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 第65巻・第9号
2. 論文標題 世界がゲッター化する時代に ゲッターの春	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 154-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 第65巻・第11号
2. 論文標題 世界がゲッター化する時代に ゲッターの内と外	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 150-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 第66巻・第1号
2. 論文標題 世界がゲッター化する時代に ユダヤ人の死	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 第66巻・第3号
2. 論文標題 世界がゲッター化する時代に 生きるか死ぬか	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 128-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 702号
2. 論文標題 死者は生者のなかに 見られるものなら見てみるがいい	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 50-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 704号
2. 論文標題 死者は生者のなかに 女はゲッターと関係結んで	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 34-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 706号
2. 論文標題 死者は生者のなかに みんなは天使に変身ね	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 34-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 708号
2. 論文標題 死者は生者のなかに なぜ彼らは羊のように	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 36-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 710号
2. 論文標題 死者は生者のなかに 狩人に追われて逃げまどう	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 14-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 第65巻3号
2. 論文標題 世界がゲッター化する時代に ゲッターの子ども	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 140-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 693号
2. 論文標題 死者は生者のなかに 歌の発生・再生・転生	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 695号
2. 論文標題 死者は生者のなかに 彼女たちに無用の苦しみを与えてはならない	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 44-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 697号
2. 論文標題 死者は生者のなかに 十人の敵でも与えられないほどの害	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 44-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 699号
2. 論文標題 死者は生者のなかに 抵抗するために生き、生きるために抵抗する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 みすず	6. 最初と最後の頁 46-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西成彦	4. 巻 第66巻・第5号
2. 論文標題 世界がゲッター化する時代に 入りなさい、行きなさい	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代詩手帖	6. 最初と最後の頁 128-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 西成彦
2. 発表標題 語圏を跨いで生きること、そして書くこと
3. 学会等名 昭和文学会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 西成彦
2. 発表標題 ホロコースト文学は誰が担うのか?
3. 学会等名 神戸・ユダヤ文化研究会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 西成彦 (源貴志、宗像和重、坂口周)
2. 発表標題 シンポジウム「二つの「世界文学」のあいだ いま比較文学は何ができるのか」
3. 学会等名 日本比較文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西成彦
2. 発表標題 「亡命文学」から目が離せない時代
3. 学会等名 日本スラヴ学研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 西成彦	4. 発行年 2022年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 234
3. 書名 死者は生者のなかにーホロコーストの考古学	

1. 著者名 Nishi, Masahiko, Kato, Ariko, Jacek Leociak, Barbara Engelking, Joanna Tokarska-Bakir, Piotr Forecki, Tetsuya Takahashi, Takuma Higashi, Hiroko Takahashi	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Instytut Badan Literackich	5. 総ページ数 214
3. 書名 Holokaust i Hiroszima w perspektywie	

1. 著者名 石川達夫、貝澤哉、奈倉有里、西成彦、前田和泉	4. 発行年 2023年
2. 出版社 成文社	5. 総ページ数 174
3. 書名 ロシア・東欧の抵抗精神 / 抑圧・弾圧の中での言葉と文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『死者は生者のなかに / ホロコーストの考古学』の刊行後、野村真理氏（金沢大学名誉教授）の『ウィーン ユダヤ人が消えた街』（岩波書店、2023）と合わせた合評会を、立命館大学国際言語文化研究所と、本科研費研究の共催で実施した（2024年2月18日）。そこでの議論の内容は『立命館言語文化研究』36巻2号（2024年11月刊行予定）に掲載される予定。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------